

浅草橋袂鑑  
あさくさばしはらえかがみ

「健司、これも持って行きなさい、あとこれも」

玄関口で五〇代も後半の女性が紙袋をいくつも持ってくる。

「もういいって……!」

外を背にして立っているのは二〇代後半か三〇ぐらいの、背広を着た一見サラリーマン。

二人は母子おやこのようだ。

開放しの玄関の向こうからは、忙せわしないセミの声が飛び込んできく。それが母のあれこれと氣を使う行為を余計に鬱陶うっとうしく感じさせる。

八月の盆。

世間でも実家に帰るといふ恒例行事だった中の季節。

「あ、そうそう、修二おじさんから桃が届いていたのよ、ちょっと持ってくるわね」

そういつて、女性は家の奥へと消えていった。

「ええ!? もうこれ以上もてねーよ! もう行くからな!」

「結月ちゃん、桃好きだったでしょう?」

そんな声が向こうから聞こえてくる。

これではキリがない。

とりあえず玄関にまで出されたものを雑に持つと、逃げるように外に出た。

「うお……」

夏の暑い日差しと、おわつとした蒸れた空気が襲う。

耳障りなセミの声。

何もかもが面倒くさくなる。

スーツなんかで来るんじゃないかったと後悔する。

『なんで来ちまったんだろうな』

瞬時に額から流れてくる汗を、ワイシャツの袖で拭いながら、男は心の中でそうつぶやいた。

実家に帰ったのは……娘が生まれて以来だから六年ぶりだ。

別に親との仲が悪かったわけではないが……一度帰りそびれると、そのまま面倒臭くなってズルズルと帰らずに過ごしてしまった。会わない時間が長くなればなるほど、さらに面倒になってしまう。

ただ、両親に会ってもいつも通りの自分でいれることに、男は少し驚いていた。

もっと取り乱したり緊張したりするかと思っていたのだが……普通に会話することができた。

『ような気がする』

それとも自分には気づかない変な仕草とか表情とかかしていたかもしれない……。

などと思いつながら駅に向かって歩いていると、かつてこの道は小・中と通った通学路であることを思い出した。

『どうせこのあとどこに行く宛もねーし……』

駅に向かう国道六号線から左にそれて、中学校のある方に向かう。この道は中学校を過ぎて数百メートルも行くと、隅田川<sup>すみだがわ</sup>で行き止まりとなっている。

一〇二分も歩けば、母校が見えてくるはずだ。

途中、下校してくる母校の生徒たちとすれ違った。部活帰りだろうか？

制服は変わっているようだった。

一方、学校はと言うと……。

『変わってねえな』

十数年年経った分だけ古くさくはなっている……と思っていたのだが、想像したよりは古びていなかった。鉄筋コンクリートは十数年ぐらいではそんなに変わらないらしい。

『へー』

とはいえ卒業生だからといって中に入れるわけもなく。

「帰るか」

とつぶやくも、そのあとすぐに心の中で『どこに？』という言葉が続いた。そうだ、そもそも帰る場所などない。だから母校を覗いてみようという気にもなったわけで……。

借りていたマンションは解約した。

別に新居を契約しているわけでもない。

文字通り、帰るところなんかない。

『まあでも、とりあえず駅には行くか……』

元々駅に向かっていたのだからと、来た道を戻る。

相変わらずセミの声がうるさい。

でも、この学校に通っていた頃は、もつとうるさかったような気もする。

母校の隣には七階建てのマンションがあり……その隣にもマンションがあり……そういえばこっちのマンションにはクラスメイトの慎太郎が住んでいて、学校から近くて羨ましかったなあとかそんなことも思い出した。

実家を出てからはまったく忘れていたことだったが、こうして来てみると様々な感想とともに覚えているもんだななどと思いながら駅を目指していると、ふっと日陰に入った。

同時に少し涼しくなる。

大きくなるセミの声。

男は自然と顔を上げた。

「あー」

そういえば、マンションの隣には神社があったな。

ここも変わってない。

母校よりも変わってない。

確か巫女さんが住んでいた気がする。子供の頃はなんとも思わなかったが、今思い出してみると

顔立ちの整ったキレイな子だったことに気付く。でも確か病気を煩<sup>わづら</sup>っていた記憶がある。なぜなら、年はそんなに離れてないように見えたのに、真っ白い髪で今にも倒れそうなくらい細い子だったからだ。

幸<sup>さい</sup>薄<sup>はく</sup>そう。

子供ながらに一目見てそう思ったのを覚えている。だから学校にも行かずに巫女なんてやってるんだろうな、なんてことも。

これもまたこの場所に來たからこそ思い出したことだった。

『神社か………』

別に信心があつたわけではないが、いま心の中にある途方もないストレスを、ここなら少しでも和らげることができるかもしれない。

男はそう思つて神社に踏み入れた。

聖域に入つたのだと思ひ込ただけで、心が改まつた気にはなる。

あくまでも自分がその氣になつただけだ。

それでも構わない。

このざわつく心を、少しでも穏やかにすることができればなら、神でも仏でもなんでもいい。お参りの仕方を知つてゐるわけではないが、手水<sup>ちようず</sup>で手を清めて、拝殿の前で手を合わせる。だが、祈ることは何もない。

願うこともない。

希望もない。

それらは全て、とある場所に詰め込んで捨ててきた。

「ああ……」

ないこともないな。

男は柏手を打つと心の中で願った。

『痛い思いそせずに死ねますように』

そして、もう一つ付け加えるように思い出す。

『死ぬ勇気をくれ！』

切実である。

目をあけると、お神籤みくじの張り紙が社務所に貼ってあるのが見えた。

『気休めついでだ、クジも引いて行こう』

そう思って、両手一杯の荷物を拝殿に残したまま、社務所の窓口まで来たが、閉まっていた。

「んだよ……」

しかしよく見ると、クジは置いてある。

どうやら一〇〇円を投げ込めば、セルフでクジを引いていいらしい。

「何、このいいかげんなの」

とか思いながら一〇〇円玉を放り投げて、置いてあるみくじ筒をガラガラと振った。ほどなくしてニョキツと竹ひごみたいな細い棒が飛び出してくるので、そこに書いてある番号のクジを手取る。

クジは丁寧にも何重にも折りたたまれていた。

それを急いで開ける。

急ぐ必要はまったくないのだが、なぜか何かが書いているか知りたいという気に駆られたのだ。幾重にも折り重なったクジを開くと、飛び込んできた文字は……。

「はは、はははは……」

自然と乾いた笑いが出た。

一番上には「凶」と大きく書かれてある。

心を穏やかにするためにこの神社に寄ったのに、余計に心は騒さわついてしまった。まるで自分の心を見透かされているような気になる。

同時に怒りも湧いてくる。

旅行、バツ。

巡り合わせ、バツ。

恋愛、残念！ 破滅済み。

『自らのなした行為により全てが台無しになるであろう。自分を見つめ直し、償うべきことは償



い、弔<sup>とむら</sup>うべきことは弔うべし』

最後の「弔う」という言葉が、心に深くえぐるように刺さった。

そして「破滅済み」という言葉も。そう、破局するとか恋が成就しないとかじゃない。すでに、破滅した上に終了しているのだ。

しかも「残念」などと書いてある。

そんなおみくじってあるか!? と、心の中で叫ぶ。

「ふざけんな！」

男はクシャクシャに丸めて地面に投げつけようとした。

「そのまま捨ててはいけない」

怒りの感情に任せてクジを握り潰<sup>つぶ</sup>そうとした時、不意に後ろから声がした。

驚いて振り返るとそこには誰もいない。

が……視線を下げると、いつの間にか巫女がいた。

随分<sup>ずいぶん</sup>と背が小さいが記憶の通りの姿だ。しかし白髪の巫女とは記憶の中のことで、よくみると彼女の髪は艶<sup>つや</sup>やかな銀髪だった。

そうか、あの頃は俺も中学生で背もそんなに高くなかったから、この巫女がそこまで小さいとは思わなかったが……

「望まないクジが出てきた時には、あの木に結ぶと良い」

巫女は社務所の隣にある枝の多い木を指さした。姫神ひめがみと呼ばれる灌木かんぼくよりは少し大きな木だ。そこには既にいくつものクジが結ばれていた。

「あ、ああ、そうさせてもらうよ」

一旦怒りを収めると、クジを結べるよう細く折り畳み、言われた通りに枝の一つに結びつける。などとしていると、後ろがガタガタと騒がしい。

巫女が閉めていた社務所を開けているのだ。

時折、「んしょ」とか「ぐいー」とか「ふう」とか独り言が聞こえる。

こんな奴だったのかなどと思うが、そもそもこの神社の巫女と会話をしたことは、今日が初めてだった。

「これで何が変わるんだ？」

結び終えて特にすることもなかったので、忙しそうな巫子に声をかけた。

「それはあなた次第」

お守りの入った箱を表に出しながら、巫女は素っ気なく答えた。

「？」

「厄が払われたとあなたがどこまで信じ込めるか。それによって、あなたの運命が決まる」

「なんだよそれ、意味わかんねえ」

「クジに書いてあることに心当たりがあって、それが不吉だと思って木に結んだのなら、その不

吉なことは祓<sup>はら</sup>われた」

「あ、ああ、そうなのか？」

「と、信じ切れば、あなたはその不吉なことを気にせず生きられる。けれど祓<sup>はら</sup>われたことを信じられずいつまでも不安なままいれば、自然と不幸を意識し、自分の身の回りで起きる様々なことが不幸なことと感じてしまう」

「そんなもんかね」

「信心とはそう言うもの。信じる力があなたを変える。良い方にも、悪い方にも」

「……なるほどな」

「人は信じてないものに頼ったりはしない。だから神がいるとかいないとかではなくて、あなたの信じるものがあなたの人生に作用する」

「でもさ、それならクジなんて引かなくてもよかったんじゃないの？ 結局は、俺次第ってことだろ？」

クジを引かなければ、そもそも凶などという文字を目にすることもなかったはずだ。

「けれど、あなたは今の自分の運勢や運氣がどんな状態にあるのか知リたかったはず」

「う……」

「知りたくなければ、クジは引かない」

「それはたまたまクジが目に入ったから」

「けど、気にならないなら引かない。引いたと言うことは、運勢が気になっていた証拠！」

巫女は一步も譲る気はないようだ。

「神社に来たら、クジは引くもんだろ？」

「そんなの人による」

「あいな」

「少なくとも、引く人はクジに書かれていることを気にするはず」

「馬鹿馬鹿しい」

「コク、そう思うこともまた一つの特徴だと思う。クジの結果を気にするばかりに不幸を呼び込んでしまうこともある」

「なんだよ、やっぱり、引かない方がいいんじゃないか」

「けれど、クジに書かれていたことが気になったと言うことは、心当たりがあるということ。クジに書かれていることを自分に投影し、自分との共通点を見いだす」

「……」

男は否定できなかった。

「あなたはクジに書かれていることを見て、自分に当てはまった、だから木に結んだ」

「あ、ああ、そうだな」

「結んで、心は穏やかになった？」

「え」

「これでもう大丈夫と言う気になった？」

「それは……」

なるわけない。そんなことで心が穏やかになるほど、今の状況は優しくない。

「結べば、厄は払われる。だから例えクジに書いてあることが当たっていたとしても、これですべて解決」

「気休めかよ」

「どうやら気が休んでいない様子」

「うるせーよ」

「心の中のざわめきがあまりにも大きすぎると、クジを木に結んだ程度では心は落ち着かない」  
「やめろよ、お前に何がわかる」

「逆に、自責の念が強くなることも、ある」

巫子が男との距離を詰め、真剣なまなざしで男を見つめた。

「クジを木に結んだのに、あなたの心は騒がしいまま」

その瞳は、まるで自分の心の中を読み取っているかのようなのだ。

「やめろ！ やめろって言ってんだろ!!」

男は後ずさりすると、何かを振り払うように首を振った。

「弔え！愛する人が、それを望んでいる！」

巫子は後ずさった男にさらに詰め寄った。

「なんだと!!!」

今度は男は振り払うように巫女を退けようとしたが、巫女はさらに男の懷に飛び込むと、見上げて男の顔を睨んだ。

「あなたの、すぐ後ろで、あなたが弔ってくれるのを待っている」

その巫女の視線の焦点は、男よりも後ろにあっているように見えた。

「黙れ！俺の後ろに誰がいるっていうんだ!!」

その巫子の視線に耐えられず、男は逆に巫子につかみかかると、そのまま地面へと押し倒した。馬乗りになって、なんのためらいもなく巫子の首を両手で押さえていた。

自然と両腕に、そして手のひらに力が入る。

巫女は抵抗するでもなく、ただその一部始終を黙って見つめていた。

苦しくないのだろうか？

「俺の後ろに誰がいるっていうんだ!! おまえに何が見える。なにが解るんだ!!!」

男はそう叫ぶと、一層強く巫子の首を絞めた。

そこまで力任せに首を絞めたら、巫子が答えられるはずもない。

「誰のことを言ってるんだ!!」

しかし激昂<sup>げきこう</sup>した男に、もはや巫子の答えを聞く余裕はなかった。

このまま巫女が事切れるまで、この力を緩<sup>ゆる</sup>めることはないだろう。

それでも巫女は何も抵抗せず、ただ黙って自分に覆<sup>おほ</sup>いかぶさる男の向こうを見つめていた。その視線が余計に男の心を騒がし、男の腕に込める力をさらに強めた。

「何をしている!!!」

不意に男の肩が掴まれ、思い切り後ろへと引き倒された。

そのまま尻餅をついて倒れ込む。

あまりにも突然のことに、男は状況が理解できずキョロキョロと見渡したが、自分の肩を押さえている人物が視界に入って我に返った。

「っ!!」

男を巫子から引き剥がしたのは、警察官だった。

そしてもう一人の警察官が、自分の傍<sup>かたわ</sup>らに立っていた。

一瞬で青ざめる。

いろんなことが頭の中を巡る。

どうすればいいのか。

逃げるのか？

いや、自分のしてきたことはまだ誰も知らないはずだ。

ここは軽くあわせて、さっさと逃げよう……などと打算する。

「お兄さん、これは完全に暴行ですよ。どういった事情か聞かせてもらいましょうか」

警察官がそう言うと、男の腕をつかみあげて立ち上がらせた。

さすがに警察官二人に立ちはだかれたのでは、どうしようもない。

「ちあらちゃん、大丈夫だった？」

警察官の一人が、巫子に声をかけた。

「大丈夫」

巫子は何事もなかったかのようにスックと立ち上がると、コクリと頷いた。首はほんの少しだけ、手形の形に赤くなっていた。

「交番がすぐ近くなんで、そこで話聞かせてもらおうか」

警察官は男の腕をがっちりつかんだまま、離す気はないらしい。

もう一人は無線を使って、連絡をとっていた。

「わ、わかったから離せよ！」

男は体を振らせ<sup>よじ</sup>るが、警察官は放す気はないらしい。

「おまえら何の権限があつて……！」

「ちあらちゃん、この男が言つてた男で間違いないかい？」

警察官が暴れる男をヨソに、念のための確認する。どうやら彼らはあらかじめ巫女によって呼



び出されていたようだ。

すると巫女は深く頷く。

「わかった。で、容疑は？」

容疑という言葉聞いて、男の動きも止まった。何のことだとばかりに巫女を睨む。

「住んでいたマンションの住所を聞き出して。バスルームの天井裏に衣装ケースが二つある」

「え……なんでおまえが……」

その言葉を聞いて男の身体から力が抜けていくのが、男をつかんでいる警察官の手に伝わった。警察官が男の肩を支えて、男が倒れてしまうのを補佐した。

「そこにその人の妻と娘の遺体がゴミ袋に小分けされて入っている」

「えっ」

その惨状を想像したのだろうか。二人の警察官は絶句し、驚きの表情を隠さなかった。

「……」

跪いていた男が、ゆっくり巫子を見上げた。

その表情は複雑だ。

怒りに満ちた表情ではあったが、しかしどこか悲しくもあり、またホツとしているようにも見えたからだ。

彼自身も、感情の制御はできていないのだろう。

「あなたが死に取り憑かれていることをわたしは見た。だからあなたの記憶に入り、あなたをここへ呼び寄せた。死んではいけない。死ねば、あなたもまた、死を招く者となってしまいうから」

「俺を……呼んだ？」

「逮捕されたことに、安心するといい。あなたの魂は、まだ元に戻るチャンスがある」

巫女はそういうと、柔らかな笑みを男に手向けた。

「この不幸はあなたから始まったものではない。元の自分を、取り戻して欲しい」

そして巫女は自分の首を絞めた男の手をそとつかむと、一瞬だけギュツと力を込めて握った。

巫子が何をしたのかは解らなかったが、自分の手から、何かが抜け出ていくようなそんな感覚を男は感じ取った。

「さ、行こうか」

警察官が男を立てて引きずるように連れて行く。

男も途中ですべてを諦めたのか、立ち上がり、警察官に付き従った。

ここから交番はものの一分も歩かずにあるのだが、どうやらパトカーを直接差し向けたようだ。神社の前にはすでに二台のパトカーが来ていて。中から警察官がさらに二人、こちらに向かって来るのが見える。

無線の音が騒がしい。

巫子は男が後部座席に押し込まれるように乗るのを確認すると、ぐるーっと後ろを振り返った。

「残るは……」

ある一点を見つめる。

杉の木々のざわめきと、蟬の声に満たされた境内に、ぽつんと二つの魂が浮かんでいた。

あの男に殺された、母娘<sup>おやこ</sup>の魂だ。

すでに理性を失い、怒りと絶望とに満ちた怨霊となってしまうている。

ずっとあの男に憑いていたのを、巫子が引き剥がしたものだった。

恨めし<sup>うら</sup>そうに巫子を睨んで、ゆらゆらと揺れている。

巫子は一気に間合いを詰めると、怨霊に向かって右手を掲げた。そして、魂を滅するための呪文を唱えはじめる。

一刻も早くこの怨霊を退治しなければ、他の人間にとりついてしまうかもしれない。

霊の方も巫女に取り憑こうと、巫女に向かって飛んで来ていた。

二つの怨霊が手を伸ばした巫女の腕に絡みつき、そのまま一気に巫女の顔面まで近づく。

ここまでは巫女は無抵抗だった。

二つの怨霊はそこで一度溜めを作ると、巫女の頭の中に入ろうとしたが……。

「ふ……！」

巫女の頭めがけて飛び込んだ瞬間に、二つの怨霊は霧散してしまった。

一瞬の出来事であった。

怨霊が消え去ったあとも、巫女はしばらく右手を掲げたままじっとしていた。

自分の腕に巻き付いたあの二つの怨霊から、その思念とでも言うか、感情とでも言うか、魂の中に残っている記憶を読み取りたかったからである。

なぜあの男が愛する妻と娘に手をかけたのか。

それを知りたかったのだ。

「ふむ……」

娘が生まれた頃、男が昇進コースから外れてしまったあたりから、家庭に齟齬が生まれるようになってしまったようだ。

圧迫する家計、パートに出て行かなければならないストレス、そして重くのしかかる育児……。妻は男に愚痴をこぼすようになり、さらに近所でもこぼすようになり……。そして娘にもこぼすようになった。

男の悪口を聞きながら育った娘は、物心ついた頃には、父である男を蔑むさげすようになった。

昇進コースから外れた男は会社でも孤立し、家庭でも孤立し……。ますます家庭内の齟齬は広がり、お互いを憎むようになってしまった。

そしてある日、娘の心ない一言によって、ついに男の理性は吹き飛んでしまったのだ。

「むう……」

ただこの時点で、母に良からぬ霊が取り憑いたのかまでは、解らなかった。また、母に取り

憑く前は一体どのような怨霊だったのかも……探れなかった。

日々、夫である男の陰口を叩くウチに、どこかで怨霊を拾ってしまったのだろう。

主婦たちの集まりの時か。

幼稚園での送迎の時か。

どこかで母の負の感情に同調する霊に出会ってしまったのだろう。

怨霊は母娘の魂を蝕み<sup>むしば</sup>、やがて男の魂も蝕み……男が母娘に手をかけたときには、すでに男も取り憑かれていた。

怨霊に取り憑かれたまま死を迎えた魂もまた、怨霊となる。そして怨霊となってしまった魂は……もはや浄化も成仏もできない。

消滅、あるのみ。

「あー……」

もしくは地獄に送るという手もあったか……と巫女は思い出した。地獄に下り、そこで試練を受け直せば、もしかしたらまた輪廻転生の輪に戻ってやり直せたかもしれない。が……巫女は魂を地獄に送る方法を知らなかった。なぜなら、この巫女は、神道の巫女だからである。仏門にはあまり詳しくないようだった。

「うんむ」

一通りの事件のあらましが解ったところで、巫女は満足げに頷いた。

二人も殺害したとなると、極刑を免れるのは難しいかもしれないが……彼が元の魂を取り戻し、誠心誠意申し開きをするなら、きっと生きる道も開けるだろう。

巫女はクジがたくさん結ばれているあの木のそばに駆け寄ると、男が結んだクジをほどこいた。もう、このクジに役目はない。

「被え……！」

その巫女の言葉とともに、小さな青い炎が上がったかと思うと、クジはその身をくゆらせながら灰となった。

その天に吸い込まれる纒わすかな煙の残滓ざんしが、滅んだ魂のせめてもの弔いの証となることだろう。

了

